

幸福と不幸は同じコインの表と裏か

——SSP2015 調査データによる分析——

○北海道大学 カローラ・ホメリヒ
成蹊大学 小林盾

1 目的

これまで幸福と不幸は、連続的に捉えられてきた。しかし、「幸福な家庭はどれも似たものだが、不幸な家庭はいずれもそれぞれに不幸なものである」(『アンナ・カレーニナ』)としたら、2つは別の規定要因をもつのかかもしれない。本報告では、社会的地位に対して学歴が持つ象徴的な価値(吉川 2014)が、不幸な人々と幸福な人々の間で異なるのではないかと想定して、主観的幸福に対する教育の効果に着目する。そこで、仮説1「幸福の規定要因は、自らに対して幸福と不幸のどちらの評価を与えているかによって異なるだろう」と、仮説2「不幸な人々にとって教育は幸福感を大きく上げる。幸福な人々にとっても上げるが、効果は小さいだろう」という2つの仮説を検討する。

2 方法

そこで本報告では、第1回SSP調査(SSP2015)のデータを用いて分析を行う。仮説をテストするにあたって、人々の幸福度(「幸せ」「平均」「不幸」)に応じて標本を3グループに分類し、多項ロジスティック回帰分析を実施することで、「不幸」な人々の幸福感が上昇する条件や、「幸せ」な回答者が依然幸せであり続ける条件を分析する。

3 結果

分析の結果、「幸福」グループと「不幸」グループとの間で規定要因が異なった。したがって、仮説1は支持された。また、「不幸」グループでは教育が幸福を高めたが、「幸福」グループにはかえって幸福感を低下させた。したがって、仮説2は部分的に支持された。

4 結論

以上から、幸福は多次元的な概念として理解される必要がある。つまり、幸福と不幸は同じコインの表と裏とはいえず、むしろ異なるメカニズムを持つ別々の貨幣なのかもしれない。またこの結果は、日本社会の中で、教育が持つ象徴的価値の多様な役割を示唆する。現在の生活状況に不幸を感じている人にとって、教育は物事が良い方向へ転じる見込みをもたらし、ポジティブな希望を創出し得る。しかしながら、現状ですでに幸せな人にとって、高度な教育によってもたらされる期待感の上昇は、さらなる「渇き」をもたらし、バランスの取れたポジティブな自己評価を揺るがすものとなるのかもしれない。

文献

吉川徹, 2014, 『現代日本の「社会の心」——計量社会意識論』有斐閣。

Kobayashi, Jun and Carola Hommerich, 2017, “Are Happiness and Unhappiness Two Sides of the Same Coin? An Analysis of Happiness and Unhappiness,” *Sociological Theory and Methods* 32(1): 49-63.

Layard, Richard, 2005, *Happiness: Lessons from a New Science*, Penguin Press.